

平成20年度2月 品川区学力定着度調査

小中連携による学力向上に向けた取り組み結果の公表

目 次

1 7年生の調査結果等から見られる5～7年生の課題

- (1) 日野学園7年生の結果から見た5・6年生の課題(国語、算数・数学共通)
- (2) 区内7年生全体の傾向を踏まえた分析、課題の明確化(国語)
- (3) 区内7年生全体の傾向を踏まえた分析、課題の明確化(算数・数学)

2 課題に基づいた5～7年生の目標

- (1) 今後の指導・対策の目標(国語)
- (2) 今後の指導・対策の目標(算数・数学)

3 課題解決のための方策

- (1) 基本方針
- (2) 具体的な対策

1 7年生の調査結果等から見られる5～7年生の課題

- (1) 日野学園7年生の調査結果から見た5・6年生の課題(国語、算数・数学共通)
- 国語、数学とも半数以上の設問が、習熟基準を上回る正答率であり、全体的には定着状況は良好であるといえる。概ね良い結果をあげているので、現在行っている学習は引き続き指導を重ねていく方向でよい。その一方で、習熟基準を下回る正答率の設問が40%程度あることから、その部分については重点的に改善・対策をしていき、どの時期にどのように指導していくかについて考える必要性が明らかになった。
- (2) 区内7年生全体の傾向を踏まえた分析、課題の明確化(国語)
- 漢字では、「読み」はよいが「書き」は努力を要するというのが区全体の調査結果から明らかになっている。日野学園7年生の調査結果でも同様である。
- 習熟基準を下回った問題は、言語事項に関する内容(主語・修飾と被修飾の関係・敬語の使い方)、文学的文章の読み取りに関する内容(表現の特徴・登場人物の描写)、説明的文章の読み取りに関する内容(文章の展開に即した内容把握)などで、昨年度と同じ傾向が見られる。特に、敬語の使い方についての定着度が低く、漢字の書きと併せて日常生活の中で使用頻度の低いものをいかに定着させていくかが課題となっている。
- (3) 区内7年生全体の傾向を踏まえた分析、課題の明確化(算数・数学)
- 「数と式の意味と計算」の内容の多くは区の習熟基準を上回り、定着していると考えられる。しかし、計算の中でも「少数÷少数の乗法・除法」や「分配法則を用いて工夫して計算する」問題に対しては、習熟基準を下回っている。また、「数直線上の負の数を読む」ことや「道のりと速さから時間を求める式」、「2つの量が比例する関係」や「与えられた比例の式を満たすグラフ」、「X、Yの値から反比例の式」を選択したりする問題などが下回っており、区の全体的な傾向と似た結果となった。日常の中にある数量関係を数学的に捉えることが苦手な傾向が見られる。図形と計量についても、全体的に定着度が低く、図形の内角を求めたり、面積・体積を求めることについて、演習・練習量の少なさが影響しているのではないかと考えられる。

2 課題に基づいた5～7年生の目標

- (1) 今後の改善・対策(国語)
- ・書き誤りやすい漢字については、授業の中で意図的に取り上げ、注意を促し確認する指導を行う。また、既習のものも含め、繰り返し漢字を書かせる指導を徹底し、確実に身につけさせる。さらに、例文や作文の中でも、辞書を用いながら積極的に正しい漢字を活用させつつ、語彙力を育成する指導も継続的に行うことで、漢字を書く・用いる力を伸ばす。
 - ・1年から7年まで「漢字ステージ100」を利用した学習によって、漢字の正しい形や筆順、語例や例文による語彙理解、作文への活用等の指導を行い、弱点補強をする。
 - ・8・9年、特に8年への指導については、必修授業及びステップアップ学習での指導を継続的に行い、正しい漢字を繰り返し書くことによって、漢字の力を補強する。

- ・文法や語句の知識については、「文法」や「言語」の分野で指導するだけでなく、読解指導や作文指導で積極的に取り上げ、日常の会話においても正しく使用できるよう、繰り返し確認する。
- ・キーワードに注意しながら読み、文章構成を理解させる。また、問題の条件（何文字以内や、「～から」などで終わるなど）に合わせた解答の仕方を理解させることも必要である。読解指導だけでなく、作文やスピーチにおいても論理的に説明させる学習を行う。
- ・授業の中で、原稿用紙を用いて短い作文を繰り返し書かせることで、総合的な文章力を養い、自分の伝えたい事柄を明確にし、具体的に表現できるよう、指導を行う。接続詞を巧みに用い、滑らかな文章を作るコツや、文末表現を工夫し論理的な文章を組み立てるコツを段階的に指導していく。

(2) 今後の改善・対策（算数・数学）

「小数の計算」や「速さの問題」は、毎年子どもたちが苦手とする単元である。克服するために、放課後等を利用した個別指導と反復練習を強化していく。個別指導は、授業内だけでは定着できない児童・生徒を中心にいき、その日の授業の内容はもちろん、既習学習についてもまだ習得できていない部分までさかのぼって指導していく。反復練習として、昼ステップの時間を有効に活用していく。習ったときには解けた問題も、しばらくやらないうちに忘れてしまうので、昼ステップでは、スパイラルによる繰り返しの指導を重点的に行っていく。

さらに、日常の中にある数量関係を数学的に捉えることが苦手なので、授業の導入や文章題の際に具体的なものを使い、実感をもたせて考えていけるように工夫していく。算数・数学が不得意な児童・生徒は、どうしても苦手意識が強くなってしまっているので、実際の生活に結びついていることや、解ける喜びが実感できるよう指導していく。

3 課題解決のための方策

(1) 基本方針

小中一貫教育カリキュラムに基づき、9年間の学習活動を通して、基礎基本の定着と応用力を高めていく。まず、1～4年は、基礎基本の定着を徹底させる。次に、5～7年では、一貫校の特色である教科担任制を緩やかに導入し、専門性を生かした指導によって、基礎基本のさらなる定着と発展的な学習の基礎となる力をつけていき、さらに、8・9年は、基礎基本を確実なものとし、発展学習に取り組む態勢を構築していく。

また、豊かな人間性を身につけ、社会性を育むために、市民科の授業を充実させるとともに、学級・学年での活動、小中一貫校ならではの異学年交流、学校行事などを実施することで、多面的な学力と豊かな心を育てていく。

- ・小中一貫教育カリキュラムの実施と教科担任制の実施。
- ・都・区講師の適正な配置と活用。
- ・ステップアップ学習 ・ ・ の充実。ステップアップ学習（根っこの時間）による基礎基本の定着、ステップアップ学習 における学習内容に加えるキャリアアッ

プの視点、ステップアップ学習 での問題解決学習。

- ・習熟度学習、少人数学習、個別学習等様々な学習形態の展開。特別支援教育の推進。
- ・小中一貫校の特色を最大限に活用し、豊かで多面的な学力と豊かな心の醸成。

これらの基本方針は、本学園が5月に公表した「平成20年度2月実施 学力定着度調査の結果」と同じである。今回、連携している御殿山小学校、第一日野小学校、第三日野小学校と本校の4校合同研究会でこの方針を確認し、さらに進めていくということになった。

(2) 具体的な対策

小・中連携校で一致して取り組む内容

4校合同研究会で、学力定着・向上について、継続して協議・検討を行う。

年間3回の合同研究会では、各校の実態について情報交換をし、各教科においての7年生の実態から、各学校でどのように学習を進め、カリキュラムを定着させるかについて研究実践を進める。

第1回の4校合同研究会で話し合った確認事項を基に、2学期以降の学習計画の練り直しや日々の授業の中で実践する。

【国語】

漢字の「書き」の定着率が低いことについては、学習した漢字を使うことを児童・生徒に意識させるために、日頃から指導する側がノートや掲示物に学習した漢字を使用しているかチェックをする。漢字を使う環境を整える必要がある。

文法事項や敬語など、日常の中で使うことが少ないことについては、教師が意識的に問いかけたり、考えさせたりして、児童生徒が使わざるを得ないような環境を設定する。

漢字の定着については、昨年度に引き続き漢字定着度調査を実施して、集中して練習できる期間を設定し、児童の苦手な漢字や語句についても探っていく。

【社会】

小学校によって、指導内容にばらつきがあるので、まずは品川区のカリキュラムを理解し、それに沿って実践していくこと、副教科書を必ず使用することを確認した。また、6年生でも歴史学習は行うが、小学校では知識理解に重点を置くのではなく、調べ学習・新聞作り・歴史人物カルタ作りなど様々な学習方法を駆使しながら、活動を豊かにしていく。その過程で、学習の仕方を確実に身に付けさせていくようにする。

【算数・数学】

小学校においても小数の計算に対する苦手意識がある。5年生で学習する内容だが、6、7年生ではほとんど出てこない内容なので、定着率が低いまま7年生になってしまおうと考えられる。当該学年の学習内容ではなくても、定着率の低い内容については、帯の時間などを活用して、繰り返し練習をすることが必要である。苦手な分野は例年ほとんど変化がないので、その分野を取り入れた学習指導計画を作り、実践する。

【理科】

4年生までは、理科に対する関心が高くても、5、6年生になると実験の意味が分からなくなったり、様々な事象が理解できなくなってくる子も増えてくる。理科が好きな状態で中学校にあがってくるのが理想である。そのために、小学校のうちから実験すると

きの安全指導を徹底的に行い、器具の取り扱い方を具体的に指導する。考察する力を付けるための具体的な手立てを考え、各校が取り組んでいく。

【英語】

現在の7年生は英語学習に慣れており、理解力もある。小学校段階では様々な活動を通してはっきりと発話できるように指導し、英語を話すことに慣れさせていく。また、高学年では、ベネッセの教材(A B C Tree)を活用しながら文字指導も適宜行っていく。

【保健・体育科】

現在の7年生は運動への意識や意欲が高い。基本的な活動や運動を大切にし、止まる・曲がる・振り向いて投げる・見たままの動きを真似するといった力がたりないので、そういった基本動作をしっかりと子どもたちに身につけさせたい。体育の授業では、運動量を十分に確保し、領域の特性を抑えた価値ある動きを教えること。学びあいにつなげ、日常化を図りそれぞれの学校状況に合わせて学習活動を工夫していく。

【音楽】

音楽に対する興味関心には学年によってばらつきがあるが、子どもを音楽嫌いにさせないためにも、小学校段階でいろいろな表現活動を体験させておく必要がある。また、中学校では合唱中心の内容になりがちなので、5・6年生で小編成のアンサンブルを取り入れておき、中学校では小学校での経験を生かした器楽合奏を学習させる。

【図工・美術、技術、家庭】

ミシンで自分の手を縫ってしまう子や刃物でけがをしてしまう子がいる実態をふまえ、授業規律を確立させながら、安全を確保した授業を展開できるようにする。刃物を安全に使用できるように 人を傷つけない 物を傷つけない 自分を傷つけないという3つの約束などを活用しながら指導を行うこと、グループの人数をなるべく少なくして安全を確保していくことなどの共通理解を行った。